

欧米におけるIoT最新情勢

④

英国のIoT政策 スマートシティ

国際IT財団 事務局長 齋藤 奈保

ドイツのIoTが製造業を中心に展開されているのに対し、国内総生産における製造業比率が低い英国では、公共交通やエネルギー・環境、生活関連等の分野での展開が図られている。その代表例が「スマートシティ」である。スマートシティとは、環境に配慮しながら都市インフラ全体をIoTにより効率化

先と次駅案内の自動アナウンスを実現し、利用者の利便性を飛躍的に向上させた。さらに、全てのバスに監視カメラが設置され、防犯にも貢献している。

例えば、2008年、ロンドン交通局がiBusという総合バスロケーションシステムを導入した。トラッキングシステムとロケーション（位置情報）システムを同期させることで、全てのバスで行き

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

また、地下鉄では、線路などの施設にセン

サーやデバイスが埋設され、その収集データから不具合状況を察知し、効率的に施設管理を行っている。

環境、生活関連分野等での展開図る



techUKのマクナマラ執行役員

イを支えるのは、欧州トップクラスを誇るクラウドやデータセンターサービス、さらにはHPC（高性能コンピューティング）技術である。英国のデータセンター投資額は150億ポンド（2013年）と、米国に次いで世界第2位である。ソフトウェア・ITサービス産業の市場規模は、年間580億ポンドと欧州最大規模となっている。

IT企業会員850

chUK（英国情報通信技術・エレクトロニクス協会）のマクナマラ執行役員（スマートグリッド担当）によると、2014年に発表された、政府首席科学顧問による報告書が英国のIoTの基本戦略となっているという。

分野への応用研究に充てた。なお、自動運転などの研究開発費には、さらに1億2000万ポンドを計上している。

向こう10年間をIoTにより生活全体の生産性向上を実現する「第2次デジタル革命」と位置付けている。これを受け、政府は2015年予算において、IoT政策関連費として4000万ポンドを計上し、スマートシティの推進や医療・健康保険

地方政府の取り組みも始まっている。バーミンガム、プリストル、ミルトンキーンズなど自治体による「UKスマートシティ・イニシアチブ」がスタートし、技術標準化に取り組むという。様々な技術分野への波及効果が見込まれるスマートシティは、各都市でのスタートアップ企業の成長に貢献するものとして、地方創生の観点からも注目されている。